

胸に刻んで

仲程愛美

奨励者紹介 [なかほど・まなみ]

日本キリスト教団石橋教会牧師

同志社大学キリスト教文化センターチャプレン

わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

(コリントの信徒への手紙一 11章 23—26節)

忘れてしまう

「人間は忘れる生き物だ」と言われることがあります。むしろ「忘れることで人間は生きていける」と表現されることすらあります。引切り無しに情報に晒されているわたしたちは、そのすべてを留めておくことは不可能です。自分に必要な情報を無意識に取捨選択し、それ以外を忘れることで容量調節をしているのでしょう。

そもそも、人はどれくらいの時間、記憶しておくことができるのでしょうか。今から140年ほど前、ドイツの心理学者ヘルマン・エビングハウスは、人の記憶に関するある実験を行いました。「子音・母音・子音」をランダムに組み合わせた、何の意味も持たない音節3文字を被験者に記憶させ、その再生率を調べるという実験です。つまり、覚えた無意味な文字をいつ頃から忘れてしまうのかを測ったのです。実験によると、20分後には、42%を忘れてしまうそうです。1時間後には56%、1日後には74%を忘れています。その後は1週間後で77%、1カ月後には79%を忘却するという結果が出たそうです。

思った以上に人は記憶できないのだなと驚きました。人の記憶は1時間も経てば半分も残っていないのです。もちろん、意味のない音節を覚えるという「実験」ですので、状況によって変わることはあるでしょう。ですが、単純に記憶、脳の仕組みという点では、この実験結果は考えさせられます。人は意外と記憶できないのです。逆に言えば、1日経っても覚えていたことは、1週間が過ぎようと、1ヶ月が経過しようとも忘れない、ということが証明されているのです。

エネルギーを注ぐこと

それでも、わたしたちは記憶を頼りにします。記憶は、生きるための本能として備わっている部分でもあるからです。危険な目にあったら、同じことが繰り返されないようにと、危なかったことを覚えておきます。成功した事例があれば、その経緯から結果までを記憶に留めます。知識だってそうです。必要があると判

断するからこそ、記憶されていくのだと思います。大切なこと、重要なことが自然と頭に入っていき、人の持つ力なのではないでしょうか。

その力でわたしたちの互いの関係性を築いていきます。誰かと出会い、その人の名前を、性格や考え方や背景を、共有した事や時間を覚えていきます。相手に関する事柄を記憶していきます。そうした他者に対する記憶を組み立て、紡ぎながら、人間関係が出来上がっていく、いや作り上げているのだと思うのです。

記憶するとは誰かや何かに関心を示すことです。心を寄せることです。忘れやすい生き物だからこそ、人間は記憶することにエネルギーを注ごうとするのかもしれません。誰かのために、何かのために、エネルギーを使うこと。そのことに意味を見出しているのが、人間らしさ、人の歩みのように感じます。

旅路をたどって

話は変わりますが、ここで漫画を1つご紹介したいと思います。『葬送のフリーレン』（小学館）というものです。最近アニメ化もされたので、ご覧になった方もおられるかもしれません。物語は、魔王を討伐した勇者一行のその後から始まります。主人公は勇者一行の1人、千年以上生きる魔法使い・フリーレンです。彼女はエルフですので、人よりも寿命がとてつもないのです。加えてフリーレンは、人間の心・感情に疎く、人々の機微をあまり理解しようとしません。その彼女が、勇者が年老いて亡くなったことをきっかけに、人間を知る旅に出ることになるのです。

物語は勇者の死後何年・・・というかたちで進んでいきます。かつて魔王を倒したことで、時の人だった勇者一行。彼らの業績を記念して建てられた一行の像も、今は見る影もなくなってしまいます。フリーレンはその像を前に佇みながら、人の時の流れの速さを思うのです。寿命が千年以上もある彼女にとって、数十年はほんの一瞬です。けれども、人にとっては違います。フリーレンは時間の流れの中で、人々がかつてのこと、過去の事として受け止めていく様を見ながらも、決して蔑ろにはしない姿に、何かを感じていきます。

時間の流れは、時として脆く残酷です。それでも、フリーレンは人々の記憶に残る「勇者」と出会い、新たな出会いが与えられていきます。その過程で彼女は「人の心」を知っていくのです。記憶を辿る物語が、新たな物語を生んでいくのです。

イエスの最後の食卓

本日も一緒に分かち合いました聖書は、コリントの信徒への手紙というものでした。これはイエスの死後、20~30年ほど経ってから書かれたもので、使徒パウロがコリントという町にある教会に宛てた手紙だとされています。キリスト教を伝え広めた人物として知られるパウロですが、彼が手紙を通して伝えたことは、コリントの教会が抱えていた課題へのアドバイスであったり、クリスチャンとしてどのような振る舞いをすべきかなど、その内容は多岐に渡ります。しかし、その中心はイエスに関することが述べられています。先ほどの部分は、イエスが最後の晩餐で弟子たちに語った言葉がもとになっています。

イエスは十字架にかかる前の晩、近しい弟子たちと食卓を囲みました。過越の食事というユダヤ社会においてとても重要なものです。その食事の席で、イエスはパンとぶどう酒を手に取り、それを弟子たちに

分け与えながら言われたのです。「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」。突然の宣言に、弟子たちは戸惑ったことでしょう。ご自分の体をパンにたとえ、血をぶどう酒に例え、それを受け取れと言うのですから。何のことを意味しているのか、訳が分からない。弟子たちはイエスの言葉の真意を読み取れないまま、ただただ出来事として、その場を過ごしていたのではないかと想像するのです。

しかもこの食卓の場には、この後イエスを裏切るユダもいました。イエスに名指されたユダが皆の前から立ち去っていくエピソードが付随しています。決して、楽しく陽気な食卓ではありませんでした。けれども弟子たちにとってこの時の食卓は強烈な印象を残しました。それはイエスの言動と共に記憶されていたのです。

その日、その時を覚えて

今から29年前の今日、1月17日は阪神淡路大震災の日です。ここにおられる方にも経験された方、ご家族が経験された方々も大勢おられることと思います。当時神奈川に住んでおり、小学生だった私は、これまでに見たこともない光景にただただ驚くことしかできませんでした。そう記憶として残っているのです。

しかし、あの日を経験された方はそうではありません。痛みや不安、悲しみ、嘆き、さまざまな感情と共にあの日が思い起こされます。先日の能登半島での震災を経験された方々もそうです。これまでの災害、胸を痛める数々の出来事、それらをなかつたことにすることは出来ません。人々の記憶の中に、刻まれています。わたしたちは、それぞれの人生の中でそうした記憶に残る出来事を経験します。どれだけ時間が過ぎようとも、その時、その場を「生きた」人々にとって「その日」を忘れることはないのです。記憶が深く刻まれれば刻まれるほど、消えることはありません。

切り込んで、傷つけて、跡になる

刻むという動作は、細かく切る・切り込んで跡をつけることを意味しています。傷をつける、切り込みを入れる作業は、痛みを伴うものだと思うのです。弟子たちがイエスが最後の食卓で語った言葉を受け止めたのは、イエスが十字架にかかるという衝撃的な出来事、事件と1つになっているからです。大切な師、先生を失う悲しみ、戸惑いが、強烈な印象を残したイエスと共に過ごした食卓を、イエスが語ったその言葉を浮き立たせたのです。まさに文字通り、胸に刻む出来事だったのです。

キリスト教はある意味で記憶の宗教といえるかもしれません。イエスが行ったこと、イエスが語ったこと、そして十字架にかかったこと、それらを記憶することです。人々はそうして、キリスト教を、聖書を大切にしていきました。

わたしたちの歩みもそのようなものではないでしょうか。胸に刻んでいく。ある種の痛みや悲しみを携えながら、互いを覚えて、記憶して生きていく。その繋がりの中で、誰かを覚え、何かを覚えることにエネルギーを注いでいきたいと思うのです。胸に刻む、その意味をもう一度大切にしていこう。そんなわたしたちの歩みでありたいと願っています。

2024年1月17日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録